

主は助けを求めるひとの叫びを聴き、
苦難から常に彼らを助け出される。
主は打ち砕かれた心に近くにいて、
悔いる霊をすくってくださる。(詩篇34の18~19)

The righteous cry out, and the LORD hears them;
he delivers them from all their troubles.

この世で生きるには、私たちは生まれ落ちた時から数々の他者の助けが不可欠である。母親、病院の医師、看護師、そしてその後の保育士、幼少教育の担当者たち等々の数知れない人たちの助けと支えによって生きてきた。そのような人たちだけでなく、毎日の衣食住はすべて誰かが作ったものであり、そうした人の支えによって毎日の生活が成り立っている。

健康で苦しみを経験していないほど、そうしたことが見えない。私たちが病気や事故、あるいは家族の深刻な問題が生じたとき、どこにその助けを求めたらいいだろう。

「人生の海の嵐に」という賛美があるが、この世という海にはつねに嵐が吹き荒れている。病気、孤独、老年の悲しみ、人間の同士の心の不一致、悪意、ねたみ、背信等々そして事故や自然の災害など、そうしたものに直面したとき、それが重大なほどたちまち私たちは一人では生きていけなくなる。

私たちが本当に苦しみに直面したとき、他人にはわかってもらえない—という意識がある。この苦しみはどうして他人にわかるだろう—友人や親にもわかってもらえないと感じる。実際に命を断つ人が日本では年間2万5千人ほどもいる。もう死ぬしかない…と思い詰めた未遂の人たちも含めるとさらにその何倍にも達するという。

苦難に追い詰められたとき、私たちは何にその苦しい心、悲しみにつぶされそうになる心を持っていったらいいだろうか。そして何が究極的に私たちをそこから救いだししてくれるのだろうか。聖書には、そのことが随所に記されている。福音書には、人々から見捨てられていたような人が、キリストに向って、「私を憐れんでください！」と叫び、実際にその苦しみから救われた人たちのことが記されている。どのような人間も救いを与えてくれないときでも、私たちには求め続けるなら必ず救いだし下さる御方がいる—それが聖書に記されている神であり、キリストである。

世界のあらゆる詩のなかで最も深く受けとられ、かつ全世界で読まれ、讚美歌としても世界で用いられてきたのが聖書のなかの詩である。そこにはそうした追い詰められた魂が必死になって、神に助けを求めている心がある。数千年の昔に書かれたものであるけれど、現代の私たちの心に直接に響いてくる。それは、この世で唯一どこまでも私たちが深い苦しみや悲しみを訴える相手は唯一の神だけだからである。

健康なうちはそのようなものは要らないと思うだろう。しかし、重い病気、死の近くとき、あるいは罪のゆえに見捨てられたとき、親しかった人に裏切られたとき—そのようなときに、この聖書の詩篇の叫びや祈りが浮かび上がってくる。

詩篇は、2500年から3000年も昔で全く風土も時代も異なるゆえ、かつ日本語に訳すると十分に伝わらないこともあり、現代の私たちにはわかりにくいもの、違和感を持つ表現などもある。しかし、それらを越えて、砕かれた心、壊れてしまったような心を、深みに落ち込んでしまった心をもすくい取ってくださるのは人間を超えた存在—聖書で記されている愛と真実な神だけなのだ、ということが伝わってくる。



これは、山を少し登った所にあるわが家のフジバカマ（植栽）にやってきて蜜を吸っているアサギマダラです。

この蝶は美しく、しかも2千キロという長大な距離を海、山を越えて飛来していくという異例の能力を持つ蝶なので、多くの人に関心を持たれています。

先日、県南の家庭での聖書の学びを終えての帰途、道の駅で見つけた鉢植えのフジバカマを購入して夕方に帰宅、家の庭に置いていたところ、その翌早朝から、このようにアサギマダラが来

て、一心に蜜を吸っていたのです。

一時は5匹が来ていて、しかも、朝から休みなくずっと夕方まで、この花からほとんど離れず、時折周辺をひらひらと飛んでは再びこの花に戻って蜜を吸い続ける一という状態でした。そしてその翌日もまたさらにその翌日もアサギマダラの来訪は続いて、3日間ほどは毎日観察を続けることができたのです。以前から、11月になって家の周囲に自生しているツワブキの黄色い花が咲くと、アサギマダラが時折飛来してくることはあっても、5匹も、しかも1日中とどまっているということは、前例のないことでした。

そしてこのアサギマダラの来訪前には、今年は一度もまだ見かけたこともないので、どこからどうして木蔭の下に置いてあるこの花にやってきたのか、実に不思議なことです。

文字通り一日中夕方までこの花にとどまっていたということは、よほどこのアサギマダラは、フジバカマの花の蜜を好むのだということ、そしてフジバカマの花から放出されるきわめて微量なある種の香り（化学物質）によって、おそらくかなり遠くを飛んでいたこの蝶が引き寄せられてきたのだと考えられます。アサギマダラは、フジバカマと同類のヒヨドリバナやヨツバヒヨドリも好み、私も剣山などの標高1700メートルほどの草地で群生するヨツバヒヨドリに多くのアサギマダラが来ていたのを思い出します。

フジバカマは 現在では野生のものはまず見られなくなっていて、絶滅危惧種と指定され、日本での一般向けの野草図鑑としては、とくに重要な役割を果たしてきた700頁ほどの野草図鑑（山と溪谷社発行）でも、その写真は、自然のものでなく、植栽のものが収録されているほどです。

しかし、昔は、万葉集の時代に、秋の七草として、詠まれたことでわかるように、野山にごくふつうに見られたようです。

「萩の花 おぼなくずはな 尾花 葛花 なでしこが花 をみなへし また ふじばかま 藤袴 朝顔が花」（山上憶良・万葉集巻8の1538）（なお、ここでの朝顔の花というのは、キキョウとされています。）

極微量の化学物質を感知する特異な能力、弱々しく見える羽に2千キロも風雨に耐えて飛んでいくという力、そうした神秘をまとったこの蝶の背後に、そうした能力を与えた神の力がいかに大いなるか、また繊細なものか一天地を創造された神の全能の一端を思ったのです。